古典文学の庭園描写に関する研究

「栄花物語」(2)

河 原 武 敏*

Studies on Garden Technique Expressed in the Japanese
Classics Literature.

——“Eigamonogatari” (2)

Taketoshi KAWAHARA

摘要：藤原道長の栄華を語る『栄花物語』40巻のうち、今回研究(2)は高陽院・法成寺など9庭園24文を抽出し、修景・供用・管理の面から池泉・釣殿・渡殿・築山・植栽など修景上の新しい試み、駒競べ・鶏合せなど南庭に於ける催物を中心とした庭園生活や落慶法要に用いられた宝樹・水鳥・蓮花・宝船など造り物の庭園効果、手入れや前栽堀りなど庭園維持に関する事項について整理分析し考察を加えた。

1. 序

この研究は「栄華物語」の中から庭園描写に関する文章を抽出し、庭園名別に分類口訳のち修景・供用・管理面から論及、平安時代の庭園生活について史書を補完する立場にたつてその実態を把握しようとするものである。前回の研究(1)は文学史上に占める本書の地位、本研究の意義及び研究史に触れ、物語全体を通じて16庭園63文を描出、そのうち「殿」名の西宮殿・土御門殿・京極殿・批把殿・二条殿・鳥羽殿・内裏の7庭園39文を対象として、庭園諸施設の光・音・色による修景技法、各種催物による積極的な供用の実態、維持管理の有様など寝殿造り庭園における取扱い方を浮き彫りにして、いかに庭園が当時の生活と深い係り合いを持っているかを論じた。今回の研究(2)は「院」名の法興院・花山院・三条院・堀河院・高陽院5庭園13文、「寺」名の法成寺・法勝寺2庭園9文、「その他」大納言公任邸・中納言長家邸2庭園2文、合計9庭園24文を対象に展開する。原文は紙面及び口訳と重複する関係で割愛した。

2. 庭園描写

(1) 法興院庭園

藤原兼家の邸、もと二条院と称しのち仏寺となり、長和5年(1016)土御門殿と共に焼亡した。二条北・京極東にある。

1) 東の対の端に紅梅(巻第3、さまぎまのよろこび)

この春、大饗の時、東の対の端^{つぎ}にあった紅梅は盛りであったが、この頃は樹繁り趣もない。

(2) 花山院庭園

第65代花山天皇として永観2年(984)即位、2年後この院に出家された花山院の庭。近衛南・東洞院東にある。

1) 鶏合せ、南庭に楽屋・舞楽(巻第8 はつはな)

3月の頃、花山院は五の宮と六の宮をお喜ばせになるため鶏合せをなさる——院の有様は取決められたこと、はいえ大層な次第である。当日になると左右に楽屋を設けて様々な音楽や舞などをなさる。

(3) 三条院庭園

第67代三条天皇の後院。『小右記』長和4年(1015)8月27日条によると藤原定輔が三条故一品宮資子内親王から買取り「至尊に献じて後院となす」とあり、『御堂関日記』の寛仁元年(1017)三条天皇はこの院を禎子内親王に譲るよう藤原道長に仰せられている。三条南・大宮東にある。

1) 池や遣水こそないが大木多くけ高い趣(巻第12 たまのむらぎく)

あらためて池や遣水は造らないが、大木多く木立に趣があり、け高い感じでなみなみならぬ様子をしている。今度は特に念を入れてお造りになった。

(4) 堀河院庭園

第73代堀河天皇の後院、応徳3年(1086)即位され嘉承2年(1107)逝去。二条南・堀河東にある。

1) 足駄で庭へ出て小さき植木の手入れ(巻第13 ゆふしで)

殿(左大臣顕光)は袴を少し上げた恰好で足駄をはき、杖について園路をあちこちお歩きになり、庭の植木の小

* 東京農業大学農学部造園学科

さいのを手入れなさる。

(5) 高陽院庭園

もと桓武天皇の皇子賀陽親王の邸、當時は藤原頼道が領有し治安元年(1021)9月29日造営成り、山を作り石を立て壮麗比類なし¹⁾と云われた。中御門南・大炊御門北の南北二町、西洞院西・堀川東の東西二町を占めたという『拾芥抄』。この第一期高陽院は長暦3年(1039)3月16日焼亡、第二期復興後まもなく天喜2年(1054)1月8日再び焼け、直ちに第三期の造営にとりかゝったが頼道は前二回回は力を注がなかったらしい。後三条・白河両天皇の里内裏として終始し、延久6年(1074)2月2日頼道83才で没したのち、承暦4年(1080)2月6日再々度焼亡した。本項の1~6)は第一期、7~9)は第二期の描写である。

1) 寝殿の東西南北はみな池、中島に釣殿あり東対を馬場殿にする。駒競行幸の準備(巻第23 こまくらべの行幸)

いつしか万寿元年(1024)9月になった。関白(頼道)殿、高陽院で駒競べを催し行幸啓を迎えるため御仕度なさる——この世には冷泉院や京極殿など人は趣ある所と思っているのに、この高陽院の有様はこの世のものと思われぬ程素晴らしい。海龍王の家²⁾などは四方に四季が見えるというが、こゝはそれに劣らぬ様子で普通の家の造りと異なっている。寝殿の北・南・西・東などにはみな池があり、中島には釣殿をお建てなさる。東の対をそのまゝ馬場殿にあてられ、その前に北から南の方向に馬場をお造りになられた。

2) 太后、南庭から寝殿南の階に御興寄せらる(巻第23 こまくらべの行幸)

大宮(上東門院彰子)は京極殿においでなので(万寿元年)9月14日の夜、そこから高陽院に渡らせらる。いつよりも御興を派手になさり、おいでなさる儀式の有様は服装や飾りなどいつもの行啓に比べ勝れている。女房車は20輛ある。この御殿の草木に比べ大宮は恥しく思われて此の様に善美を尽されたのであろう——寝殿の南の階に御興を寄せられ降りられる。

3) 天皇は南庭から寝殿の階へ、東宮は筵道を西廊から西の対簀子、渡殿を経て寝殿へ入らる(巻第23 こまくらべの行幸)

こうして数日大宮が滞在なさるうちに同じ月(万寿元年9月)の19日、駒競べをお催しになる。巳の刻(午前10時)頃(後一条天皇)の行幸があり、階に御興寄せ降りられる。——東宮がおいでになると(近衛の)陣外で御到着の由奏上、御車を陣の所で担ぎ降り、筵道³⁾をお敷きしてお降りなさる。西廊(中門廊)の中の妻戸からお入りになられ西の対の簀子を通り、渡殿の簀子を渡られ寝殿の南面から御着座される。

4) 駒競べ、射騎もあり日暮れても中島から楽の音(巻

第23 こまくらべの行幸)

競馬は18番ある。少しばかり晴れの競馬でさえ乗人も馬も大層挑み合い容易に出走する事があるか。馬の心にも大変世に素晴らしい事と思って、どうかすると出掛つては尻込みするのでひどく待ち遠しく思われた。比の様な事が長びき、たびたび「これこれ(早く)」と仰せなさるので出走が始まり、回数が重なるにつれ左右互いに勝負すると、そのたびに乱声の音もはしたない程おかし。勝ち負けする乗人に対する被物(祝儀)は、左右に分かれて各々競い合せて与えた。またそのまゝ中に入る舎人共もいづれかに味方して、東宮の帯刀^{かづけもの}どもも交り合ひて射騎を行いなさる。勝負の舞なども趣深く終ると、楽所の楽器の音が暗くなるにつれ大変面白い。中島に楽所が設けられてあった。上達部・殿上人なども昔や中頃などの事を想い出される方々は「昔からこの様な盛儀は見た事もない」などと大層賞し興じられた。事終り夜に入りお帰りになる。御贈物など御心のつく限り用意なされた。上達部の禄、殿上人の被物など世に類が無い程用意なさり家司どもも(増級の)喜び^{いねばい}を受けた。

5) 珍しい草木、あどある巖石・築山と池(巻第23 こまくらべの行幸)

こゝに皇居の東、いくらか離れていない古来名勝の地に、新しく華やかな殿舎を造り続け、金殿玉楼を磨き立て、珍しい草木を掘り植え、見どころある巖石を立てならべて築山をきづき、池水を湛えさせられたのを御覧に入れようとして(大宮は万寿元年)10月(陰暦9月)18日にわかに御渡らせ給わったので、わが天皇も昨日行幸なさり一日中御遊びがあった。

6) 泉の上の渡殿、滝音も聞える(巻第32 歌合)

泉の上の渡殿に四条中納言(定頼)が参上され——その頃伊予の中納言の君が滝の音を聞いて「わきかえる岩間をくぐる滝の水の乱れ落ちる音は何と高いことよ」。

7) 東の対を欠き、築山・遣水・滝が競い落ちる(巻第34 暮まつほし)

かくて(長久4年)12月1日、また一条院が焼亡した——東の対は今度無く、山や川を造り滝の水が競うように落ちた有様は大層趣がある。女院(彰子)の御方へ出羽弁、「庭の滝の作り具合によってそこに住む人の心を知るという事は昔も今も同じであるよ」伊勢の御(藤原継蔭女)が「せき入れて落す」と詠んだ或る大納言の家構えも、こんな立派で無かったと思われる程素晴らしい。

8) 駒競べに行幸(巻第34 暮まつほし)

殿(頼道)の駒競べの催があるというので行幸があった。

9) 奥山風な築山、繁った木立内に滝、遠くまで澄んだ池、錦の幕のような紅葉(巻第36 根あわせ)

高陽院の有様は大層趣き深い。西の対をいつものように清涼殿に当て、寝殿を南殿(紫宸殿)などとし 他に

小寝殿といってこれまた大層趣深い有様で並び立ち、築山は本当の奥山のように見え、滝は木暗い中より落ち、地面は遠くまで澄み渡り、左右の釣殿など並のようでなく趣がある。秋深まるにつれ紅葉の濃いも薄いも錦の幕を引いたようである。

(6) 法成寺庭園

藤原道長の出家後造営した御堂。寛仁4年(1020)1月12日から多くの上達部まで使役して治安2年(1022)7月14日金堂の落慶供養が行なわれた。天喜6年(1058)2月23日焼亡し再建は康平2年(1059)3月27日、別名を中河御堂・無量寿院という。北は土御門大路、南は近衛大路に限られた地域にある

1) 方四町の広さ。大垣で囲み築山・池・配植・諸堂・園路に構想(巻第15 うたがひ)

方四町⁴⁾の周囲に大垣を造りその上に瓦を葺いた。(道長は)様々に指図され、工事を急がれて夜明けも待遠しく、日暮れるのも残念に思われ一晩中築山をどう築くか、池をどう堀るか 植木の配植を考えたり、しかるべき御堂を様々に造り続け、仏像は普通でよいかどうか、丈六金色の仏像も数知れぬ程造り並べ、そちらの方を北南に馬道⁵⁾を開け、道を調べ造らせようとなさり、廊・渡殿もたくさん造らせようとなさるのに、鶏の鳴くも待遠しく、宵暁のお勤めも怠らず、御安眠もなさらずにひたすら此の御堂の事だけを深く御心に占めておいでであった。

2) 石切り調える者、四五百人で池、五六百人で築山、荷車で大木、筏で盤石の運搬(巻第15 うたがひ)

また年老いた法師や翁などが3尺ばかりの石を思ひ思いに切り調えている者もある。また池を堀るとして四五百人が下りたち、また山を造るとして五六百人が登り、また大路の方を見れば力車に言うに言われぬ程の大木を綱付けて大声を出して引きながら上ってくる。加茂川の方を見ると筏というものに縛(くは) (皮付丸太)や材料をのせ、棹さしながら気持ち良さそうに大声で謡いながら上ってくる——盤石という程の大石を小さな頼りない筏にのせて引いて来るが沈みもしない。すべてあれこれと言ひ尽しようもない。

3) 東宮行啓、中門外から筵道を経て休幕へ、殿上人達は平張へ。中島に楽屋、仏堂前庭の左右に高座と中央に礼盤を仮設する(巻第17 おながく)

暫して東宮の行啓がある。事の次第を天皇に奏上した後、御車を担ぎ下して中門の外から筵道を敷き歩いて入られ——御休幕にお入りになった。上達部は今日供養される御堂の東廂にお着きになり、殿上人・諸太夫は西の廊前にある平張りに着いた。楽屋は中島に設けられ御誦経の料物も同じく平張りをして中島に置かれてある——金堂の前庭には講師・読師の高座を左右に立てて見事な天蓋で覆われ、中央に導師の礼盤が置かれてあった。

4) 庭砂きらめき池水清く。色々な蓮の造花咲く。池

辺の樹々には羅網がかゝり造りものの宝樹・橋・船・鳥達が置かれる(巻第17 おながく)

心のどかに院内の有様をご覧になると、庭の砂は水晶の如くきらめき、池の水清く澄み、色々な蓮花が並び生えてその上には総て仏の姿が現われ、池水に写り映えている。東西南北にある御堂や経蔵・鐘楼までが影を写し一仏世界の様に見える。池周辺に樹が植えられ、枝毎にすべて羅網⁶⁾が掛けられ花びらは矛かで風は無いが揺れている。緑真珠の葉は瑠璃色で頗梨珠のしなやかな枝は池底に見え、柔かな花房垂れて今にも落ちそうである。緑真珠の葉は盛夏の緑の松、真金葉は深い秋の紅葉、琥珀の葉は仲秋の黄葉、白瑠璃の葉は冬庭の雪積のようである。このように各種各様である。風が植木に吹くと池の波は金玉の岸に打寄せ、七宝の橋は金玉の池に横たわり、宝で飾った船が植木の影に遊び、孔雀・鸚鵡⁷⁾が中の洲に遊んでいる。

5) 池に面した御堂高欄下に薔薇・牡丹・唐撫子・紅蓮花の花(巻第18 たまのうてな)

この阿弥陀堂の御前の池の方は高欄を高くして、その下に薔薇・牡丹・唐撫子・紅蓮花の花をお植えなさっている。

6) 鏡の様な池面に月影、前栽に玉の露、声合せた虫の音は趣深い(巻第18 たまのうてな)

鏡の様な池の水面に影を写した月も大層美しく見えるので——池の周囲・中島・諸堂前の前栽に玉の様に露がきらめいて見えるのは仏の瓔珞⁸⁾が連想されて素晴しく、虫が声を合せて鳴いているのも趣深い。

7) 庭一面に唐撫子・籬垣結び濃淡美しく様々な草花をありたけ植えなさる(巻第18 たまのうてな)

また西北にある別院(西北院)、即ち上の御前(倫子)の御堂に連れて参ると南の方には唐撫子を庭一面に植えられ、籬が結われてあった。濃く薄く美しく色どった様が素晴らしい。東の方には様々な草前栽の数々が尽されている。

8) 万灯会。様々な灯台を競って寄進、上達部達諸堂簀子から品定め 百人余の僧、読経しつゝ池をめぐる。日没し点灯、参詣人数知れず(巻第19 御裳ぎ)

《治安3年(1023)》4月10日頃には御堂で万灯会を催そうとお考えになり、親疎を問わず殿方に「火をともし灯台1基寄進し給え」と申されたので(小一条)院を始め皆我も我もと劣らじ負けじと大騒ぎして寄進なさる。当日皆参集し御堂御堂の経蔵・鐘楼まで皆開放され、大層掃除の行きとぎいた池の周囲には、宝樹どもめぐり立て並べさせなされた。七宝で皆造ってある。それにみな金銀の網を掛けて火を灯す。車輪灯には車形・水車形、羅網灯というものには、或ひはまだら染め組紐を様々な色に染めて結び渡し、孔雀・鸚鵡・迦陵頻などの(鳥)形を造って灯をともした。池には種々の蓮の造花を作り

その上に仏像を置き仏の背光のように灯をともし。また鴛鴦や鴨や水鳥等の形に造って（池に浮べて）ある。また幡幢の形や衣笠・華鬘などの形のものに灯してある。総て見るには素晴らしいけれど、自分独りで心落つかせて見るのでないから、一つに目を留めると思えばまた一半は見失うような心地がして全くはきはきと思ひ出して話しのしようもない。四位・五位の（家司階級の）忠実な人々は殿下灯といって経蔵・鐘楼などの然るべき所々に麗々しく灯して どんな風が吹いても一向に何とも見えないで「我等が付けたのは素晴らしい出来だ」と得意になり、大いにしてやったという様な顔をしている。各々古くから使っている家の子らもめいめい「我君、我殿だけが優れている、優れている」と言うのも面白い。「昔、賀陽親王という人の細工は素晴しかった、その様な物が欲しいものだ」と言出す者もあった。上達部や殿方に「我こそ勝っており人は劣っている」と聞きづらまで御堂御堂の簀子に座って論じ品定めなさるのも面白い。申の時（午後4時頃）になると百人余の僧が麗々しく装束をつけ行道⁷して池の周囲を廻る間（灯台の立ち並んでいるのが）植木の中を分けるかと思えて大層尊くもめたい。日の没する頃、火を灯した。方四町のうちに火の灯さぬ所はない。万灯会ではなく億千万灯にも見えた。この境内に一杯になって入っている車や徒歩できた人が数えきれぬ程たくさんいる。

（7）法勝寺庭園

始め太政大臣藤原良房の別業に藤原頼通が伝領し、のち左大臣藤原師実が白河天皇に献上、天皇は寺院にするよう発願され承暦元年（1077）12月18日落成された。北は冷泉小路、南は押小路、東は白川に接し、西は岡崎広道の二町四方を占めていた。

1）紅葉や菊は一層色合いを増し、朱塗の御堂が極楽浄土のよう。池澄み船楽・船舞あり、三百人の僧が行道し、童舞の装束も趣深い（巻第39 布引の滝）

（落慶の日）よく晴れた庭に紅葉や様々の色をした菊が、黄や赤の光を加えたかと思え、場所のせいでも更によい色合いを増し、御堂のけ高く堂々としたのが新しく赤く塗られた上に青々と見渡された御堂の飾りなどが極楽⁸のよう。瑠璃を張り詰めた地上に黄金の砂を敷かんばかりの光景である。池の水は澄み渡り、船楽は打たないと鳴らないのだと大鼓をしかけた様は大げさで、獅子や狛犬に扮した舞人が舞い出た様も素晴らしく見える。三百人の僧の麗々しく装束して行道し、衆僧を加えると千人の僧が拜むことになる。童が美々しい装束しているのも趣き深い。行幸などの有様も申し分なく素晴らしい。

（8）大納言公任邸庭園

藤原公任は関白藤原頼忠の息。四条大納言と称し長久2年（1041）没。和漢朗詠、歌仙36人の秀歌を撰した。

1）撫子を数多く植える（巻第16 もとのしづく）

大納言のいる（北の対の）お庭に撫子を大層多くお植えになったが、枯れたのを御覧になって大納言は「露さえも当てまいと思って朝夕（可愛がってきた）撫子が枯れてしまったことよ」（と詠まれた）。

（9）中納言長家邸庭園

藤原道長の六男。御子左と称し冷泉家の祖で本朝歌仙正統の太祖といわれた人。

1）前栽を嵯峨野より掘り植える（巻第27 ころものたま）

（小一条）院の女御（寛子）・督（嬉子）の殿の亡なされた御事がなさけなく悲しいので、今年の秋は嵯峨野の花も（色美しく咲いたか）もなく）残念である。いつもは宮々が（この野の花を）前栽に掘り植えたり、（秋草の）花見る人も多かったから、自然の成りゆきで趣深い事もあったが——「今年の秋は見る人もなくて嵯峨野の花も咲きがいが無いけれども、あなた一人だけは思ひを野に馳せて満足したことです」。

3. 考 察

今回抽出した9庭園24文を庭園計画・諸施設に関する「修景」、庭園の各種催物など「供用」、庭園維持に係わる「管理」に分けて考察する。

（1）修景

1）庭園計画に関する描写

「三条院」には、あらためて池・遣水こそ造らないが気高く趣ある大木が多いとある。田中正大⁹はこの理由について水の便が悪く水が引けなかったという消極的な理由よりも、ありきたりでない庭の創意であろうと述べている。当時の王朝生活に欠かせない池・遣水・釣殿等を設けなかったのは、これ以外にも大きな理由があったのではなかろうか。「高陽院」第一期造営の描写には、寝殿四囲は池に囲まれ、普通は南庭の南端、池に面して建てられるべき釣殿が中島に配置され異色の取扱である。『高陽院水閣歌合』¹⁰によると東池は渡殿の下を通り北池へ通じ、舟が南池へ進む様が描かれ 渡殿下は幅広く船がゆき、出来る程のものであった。泉の上に設けられた渡廊に立つと湧き返る様な岩間をくぐる滝の乱れ落ちる音が聞こえる。珍しい樹種を配植し見所ある大石を立て築山と池泉の豪華で新趣好の庭を示している。第二期造営は東の対を欠き、広々とした池に本物の奥山に似た木深き築山があり競い落ちの滝の存在が見られる。「法成寺」は造営当時の有様について面積148haの周囲を瓦葺の大埋で囲み、各種の御堂や築山・池・配植の諸計画について道長は自ら異状とも思える程の熱意をもって考え続けたとある。工事には上達部から僧綱・諸太夫・六位以上に至るまで形だけにせよ3日間自らが参加したと『左経記』¹¹にある。この時の三尺余の石切り、四五百人による池堀り、六六百人の築山造りの人数は漸増数を

示し実数でなく誇張数であろう。また大路からは力車に大木を加茂川からは筏に丸太・樹木・盤石をのせ謡いながら運び入れるという京をあげての大工事であったことを示している。次いで落慶法要時の庭砂は水晶のようで池澄み諸堂映え様々な造り物を飾って一仏世界を再現、道長の総てを賭けた築造の有様が興味深い。

2) 植栽の特色

配植については「法興院」東の対端に紅梅の隅植栽、前栽は「法成寺」の池に面する御堂高欄下に薔薇・牡丹・唐撫子・紅蓮花の花を、また西北院の南一面に唐撫子が咲き、東の方には色々な草前栽が数を尽して植えられている。撫子は「大納言公任邸」にもたくさん植えられた描写があり、この時代に愛好された草花であることが解かる。「法成寺」の池辺・中島・諸堂前の植込みには多くの虫の音が聞え趣き深いとあるから植栽地が比較的広かったようである。また「法勝寺」は紅葉・菊の見事などが示めされている。

3) 庭園施設

「高陽院」第1期造営には、普通池岸に置かれる釣殿が中島に配され、また泉の上に架かる渡殿は納涼と観賞の重要拠点であったろう。東の対を馬場殿にも転用されその東側には南北に長い馬場が設けられるなど新趣好が凝らされている。第2期になると釣殿は右左廊の端に設けられたとあり、それが中島まで通じていたかどうか解らぬが、中島配置は不便なため再び典型的な南庭池岸配置に変更されたのかも知れない。「法成寺」の落慶には数多くの造り物が見受けられる。池辺の樹枝には羅網がかゝり四季をかたどる宝樹、池に造花の蓮・七宝の橋・雑宝の船、中州には孔雀・鸚鵡を配している。『阿弥陀経』の説く極楽浄土そのまゝの描写なので架空の表現とも考えられるが、即ち「内裏の仮前栽の競い」(研究1) 7—11) で描写されているように造物所が官中に存在しており、程度の差こそあれ事実であると思われる。

(2) 供用

1) 催物

a) 鶏合せ:「花山院」の南庭で行なわれた。広場の左右に楽屋を建て様々な舞楽が奏せらる。13世紀の『年中行事絵巻』に詳しく画かれている。

b) 駒競べ:「高陽院」で行なわれた。天皇と太後の御成りは南庭から直接寝殿南階に興が寄せられ、東宮は御車陣で降りられ庭道の上を西の廊・西の対・渡殿を経て寝殿に入られている。奥のまゝ南庭へ入れるのは尊貴の人だけであることが解る。駒競べは競馬のほかに射騎もあり勝負ある毎に笛や太鼓ではやしたて祝儀も出る。日暮れて中島の楽所から奏楽が聞こえ庭園ならではの催物が終へる。

c) 落慶法要:「法成寺」の新仏開眼供養会に行幸あり、東宮は庭道を経て御休幕へ、一般の貴族達は平張へ

入る。仏堂前庭には左右に高座、中央に礼盤が仮設され中島には楽屋があり奏楽する。万灯会には池の周囲に宝樹をめぐらし金銀の網をかけて点灯し、寄進された灯台は多種多様、造花の蓮や水鳥の造り物などは庭園に極楽浄土を再現する演出として興味深い。「法勝寺」の落慶には紅葉・菊美しく、池澄み、船樂に太鼓打ち、獅子狛犬に扮した舞がある。また三百人僧が行う金堂・講堂等をめぐる行道は、法成寺の万灯会にも百人余の麗しく装束した僧が池をめぐり廻ったとあり、こゝに庭園を回遊するという利用方法の萌芽が見受けられる。

(3) 管理

1) 手入れ

「堀河院」で藤原顕光は足駄をはき杖をついて庭をあちこち歩かれ、植木の小さいのを手入れされたとある。殿上人自から樹を手入れする趣味が見受けられる。

2) 前栽堀植え

「中納言長家邸」では宮々(小一条寛子など)が御手づから嵯峨野より前栽用の花を堀り植え¹²⁾されたとある。正月の若葉摘み同様、郊外へ気晴らしを兼ねたこの種の催が多かったものと推察される。

4. 結 び

今回の研究(2)では寝殿造り庭園に関する新しい試みや極楽浄土を再現しようとする浄土式庭園の様相が修景・供用・管理の面から次の様に把握された。

(1) 庭園計画には池泉遣水を主体とする当時の典型的な様式のほかに木立だけのもの、釣殿が南庭端の池岸でなく中島に設けられるもの、泉の上に設けられた渡殿や寝殿の四方はすべて池という構想、乱れ落ち・競い落ちの滝、見所ある大石や湧き返る岩間、奥山風の木深い築山、珍しい草木の配植など新しい修景の試みが示めされている。

(2) 南庭における鶏合せや駒競べなどの供用が重要な生活の中心の一つとして機能していた事が解かる。また落慶法要に多種多様な灯台や宝樹・水鳥・蓮花・宝船などの造り物による見事な演出や庭園回遊の始まりであろう僧侶の行道に興味深いものがある。

(3) 維持管理に関する描写は少いが、殿上人も時には庭へ降り立ち、小さな樹を手入れすることもあり、また郊外へ前栽用の草花を堀取りに行く習慣も示めされている。

この様に当時の庭園は生活と深い関係があり庭の機能を最大限に発揮させる数々の演出は庭園史上貴重な描写であると言える。

註

- 1) 『小右記』寛仁3年(1019)2月8日条に「高陽院造作天下所レ歎」とあり2年半後の治安元年(1021)完成「營造之由、作山立石公(云々カ)、高大莊麗無

レ可 = 比類 - —— 令レ成 = 五六尺立石 -, 令レ植 = 樹木 -」とある。

- 2) 海龍王の家は「四方に春夏秋冬の様見らるゝよしなり。こは出典詳ならず。仏説海龍王ありて海龍王の家の様をも載せたれど此の事見えず」『栄華物語詳解』とある。高陽殿が寝殿を中心に四方池が在り、東西南北各々に眺めを異にしている事が四季の眺めを同時に賞でる海龍王の家の様だと讃美の例え。
- 3) 筵道は貴人の歩く道筋に裾の汚れ防止用に長筵上へ敷物を敷くこと。『小右記』万寿元年(1024) 9月19日条に「次東宮参給、留 = 御東西門 -, 及 = 諸卿迎候 -, 舖 = 長筵 -, 其上敷 = 筵道 -」とあり治安2年(1021) 7月14日条の法成寺行啓時には「大門ヨリ中門ニ至り長筵ヲ以テ緑道ト為ス、中門ヨリ休廬 = 属ク道、紫絹ヲ以テ緑道ト為ス」とある。
- 4) 方四町。一町は40丈(120米強)。従って四町は約57.600 mとなる。
- 5) 馬道は建物を貫通する通路のこと。
- 6) 羅網。宝珠で飾った網。これを枝に張り様々な飾りものを掛ける。
- 7) 行道。法会の作法で仏像の回りを読経しながら歩くこと。こゝでは諸堂を回っている。『諸寺供養類記』<通言記>承暦元年(1077) 12月18日条は法勝寺について「定者、散花、引頭、衲衆、讃衆、梵音、錫杖等次第雁行、経 = 金堂・講堂・舞台等 - 東西大行道」。同記<通言記>には「其路東西廻廊一間、構 = 仮階 - 為 = 行道 -」と仮設路の事を述べている。
- 8) この頃の描写は『阿弥陀経』の「又舍利弗ヨ、極楽

国土ニハ七宝ノ池有り、八功德水其ノ中ニ充滿ス、池ノ底ニハ純^{じゆん}ラ金沙ヲ以テ地に^し布ケリ、四辺ノ階道ハ、金銀瑠璃玻瓈ヨリ合成ス、上ニ楼閣有り、亦金銀瑠璃玻瓈磤磤赤珠磤磤ヲ以テ之ヲ嚴飾ス・池中ノ蓮華、大イサ車輪ノ如シ、青色ニハ青光、黄色ニハ黄光、赤色ニハ赤光 白色ニハ白光アリテ、微妙香潔ナリ、舍利弗ヨ、極楽国土ニハ是ノ如キノ功德莊嚴ヲ成就セリ」と関係がある。

- 9) 田中正大：日本の庭園，SD選書23 鹿島研究所出版会 昭42，P.43
- 10) 『高陽院水閣歌合』「自 = 後池北 - 歴 = 寝殿東高階下 潺溪 = 参進」とある。
- 11) 『左経記』寛仁4年(1020) 正月12日条に「入道殿中宮(河)御堂築・壇穿・池築・垣等、是可^レ然上達部已下受領・語太夫、量分□□為 = 勤此事。催 = 人夫 -, 早旦臨□□上部達・僧綱・諸大夫・予(経頼)自持^レ土□□」とあり2月12日条にも「参 = 関白殿 -, 即御共(共)参 = 中河御堂 -, 入道殿自^レ兼御座。諸僧綱、各催 = 人夫 -, 除 = 平御寺中地 - 是兼日被^レ宛云々。於^レ池者、諸上達部・諸大夫、皆可^レ被^レ堀也、同兼日被^レ破(衍^ま)^レ宛也。2月15日条では「午後参 = 中河御堂 -。入道殿併関白殿已下諸上達部・殿上人・僧綱・諸大夫併ビニ六位已上、兼又雑人雑女、同心合力、或持^レ土、或運^レ木。□□各築 = 御堂仏壇 -。晚景帰宅」とある。
- 12) 『小右記』長和2年(1013) 8月14日条に「十三日壬申、今日左衛門督通人、人々ヲ相催シ嵯峨野ニ向フ、前栽ヲ堀ツテ皇太后に斎シ参ルベシ」とある。

Summary : This study (II) picked up twenty four descriptions about nine gardens in “Eigamonogatari” (forty volumes) which is about Michinaga FUJIWARA’s prosperity. The analyzed gardens are “Hokoin”, “Hanayamain”, “Sanjyōin”, “Horikawain”, “Kayanoin”, “Hōsyōji”, “Dainagon Kintoutei”, and “Chyunagon Nagaietei”. And the three points of view taken in the analysis are from the study (1).

The results of this study referred to below:

- ①.Landscape design; The new trial of garden details such as pond, Tsuridono, Wataridono, artificial hill, Senzai, and a garden only with trees.
 - ②.Common-use; The circumstances of entertainments in Nantei (south garden) such as comparison horses, and cock-fighting. The effects of man made garden ornaments used at Buddhist services such as Houju, Mizudori, Renka, and Takarabune.
 - ③.Maintenance; Maintenance and getting Senzai in suburban area by Denjoubito themselves.
- ves.